

「モノと情報」班A

竹の焼畑と稲作儀礼ー竹林文化論への試みー
川野和昭(鹿児島県歴史資料センター黎明館学)

キーワード：竹、焼畑、竹細工、混合林、再生の森、儀礼、雑草、焼米

1. はじめに～現地調査のねらい～

今回の調査は、ラオス北部ルアンパバーン及びウドムサイ地域を対象にして、そこに生きる人々との竹と関わり合いを探ることにあつた。具体的には、竹を重要視する焼畑に焦点を当て、対象とする森と竹、その竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、雑草、収穫、焼米、森の再生過程等に関する伝統的技術を聞き書きの手法で記述することであつた。

それは、これまで筆者がトカラ列島、大隅半島、九州山地で進めてきた「竹の焼畑」と比較するという意図が含まれているものである。特に竹の再生力を生かした持続可能な焼畑ということを明らかにしようとするところにねらいがあつた。それが、これまでの焼畑の研究で見落とされてきた重要な問題であると認識しているからである。さらに、日本列島のなかでも、南九州や南西諸島という地域のローカルな問題だと思われがちな竹の焼畑が、アジアというグローバルな文化として浮かび上がってくるのが期待されるのである。また、それは人と森との関わり方のモデルを示すことにつながっていくという見通しも予感されるのである。

2. 竹の焼畑の事例

以下では今回の調査で得た、竹の利用に関する調査地の人々の技術・認識について、焼畑の対象とする森と竹、竹の利用と竹細工の関係、竹の子と食、森の伐採、焼き、種蒔き、雑草、収穫、焼米、森の再生過程の順に、聞き書きの成果を述べる。

1) 焼畑の対象とする森

- ①竹と木の混合林
- ②木だけの山は水分がない。平坦な場所がなく、岩場で高い山なので焼畑に向かない。
- ③木だけの山を焼き、竹の山を保護するモン族の焼畑の棲み分け

2) 焼畑に適する竹の順位

以下では村ごとにそこで利用される竹の種類(番号を付した)をあげ、またそれぞれの竹についての現地の評価を記述する。

(1) コクナン村・タイルー族

- ①マイヒヤ：竹の皮が薄いので全部を燃やせる。肥料が多いので茎が大きく伸びて穂も良く出揃うが、川や谷沿いにあるので日陰になり、穂が大きくなる。
- ②マイライ：根が深く、あちこちに小さな塊として広がっているので水分の持ちが良く、山の尾根筋や高い斜面にあるので日当たりも良い。分蘖は少ないが穂も大きく米も美味しい。
- ③マイホック：根株が大きいため根株の周囲は良く燃えるので、肥料が多く稲も良く出揃い育ちも良い。しかし、根株と根株との間が離れすぎていて、良く燃えていないので肥料が少なく稲の生長も良くない。
- ④マイサン：土が乾いているので余り良くない。雨の多いときはよい。

(2) シブンハー村・モン族

- ①マイボン：焼いても水を溜めているから、雨が無くても稲が育つ。最初の年は根っ子まで焼けないので、次の年は竹の子が出てくる。

(3) ドウン村・カム族

- ①パーノーコム：地下茎で延びる竹で、畑全体に水分があるのできれいな稲が良く穫れる。

②パーノーラム：株立ちの竹で、これもきれいな米がよく穫れる。

※父母の時代（話者が15歳くらい）までやっていたが、現在は竹を保護するため余りしていない。焼畑には竹ばかりの山が一番適している。次に、竹と木の混じり合った山がよい。木ばかりの山は水分がないので雨の多いときはよいが、焼畑としては良くない。

(4) ラットエン村・ラオ族

①マイヒヤ：この竹が生長するところはミミズもたくさんいて土が良く水分も多い。

②マイホック

③マイライ

④マイサン：土が乾いているので余り雨が少ないときは良くない。大株の株立ちの竹で、竹の大きさはコップぐらいの大きさである。

※焼畑にはマイヒヤと普通の木の混じり合った山がよい。竹ばかりの山は雑草が多く生えて焼畑としては良くない。また、木だけの山は土が乾いていて収穫が良くない。

(5) テンケーン村・ラオ族

①大きな木だけの森。

②竹時が混じっている森。

③竹だけの森。

※ウー河を挟んで、村側は木だけの森が多く、竹の山は対岸にあり、村側では村から遠いところにある。

(6) ホワイコン村・カム族

①マイホック：株が大きく、土に水分があるから良い。

②マイヒヤ：土に水分があるから良い。

③竹だけの森。

※焼畑は、雨が多ければ方角は問わないが、雨が少なければ北と南がよい。東は午後になると日陰になり、西は午前中が日陰になるからである。

(7) ハッサプーイ村・カム族

①マイヒヤ

②マイソッド

③マイラン

④マイコンム

※木だけの山は無い。山は皆竹と木が混じり合っている。

(8) ナムコンム村・カム族

①マイボン

②マイサン

③マイヒヤ

④マイホック：株が大きいからあまり良くない。

(9) ナムレーン村・カム族

①マイタネック（マイホック）：この竹だけが生えているところは、水分が多いので稲が良く実る。木と混じると良くない。

※マイヒヤとマイソツは、生えているところと、生えていないところがあるが、マイホックはどこでも生えている。去年、マイタネックに花が咲いて、実がなって鼠が大発生して実を食べ、モグラは幹を食べてしまったので大きな竹が無くなってしまった。

(10) サナンピー村・カム族

①マイホック

②マイヒヤ

③マイボン

※一抱えあるような木と竹とが混じっている森が、米が良く穫れる。その理由は、水分があって土がよい。竹の

方が伐りやすく燃やしやす。さらに、竹の方が成長が速く、元の森に戻りやすい。

※木は1 疔ぐらいの高さのところから伐り倒すのがよい。ひこばえが出て再生するからである。根元から伐るとひこばえが出て稲の生長の邪魔になり、燃やしたときに死んで再生しない。よいが、焼畑としては良くない。

(11) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイヒヤ
- ②マイソン
- ③マイライ：マイホックより根株が小さいが、燃やすと灰が多く出て肥料が多い。
- ④マイホック：根株が大きいので水分がある。
- ⑤マイサン

3] 竹細工に適する順位

(1) ハッサプーイ村・カム族

- ①マイヒヤ：カユルー（篩：皮が薄いからへぎが取りにくい）、家の壁板、屋根葺き材、床板
- ②マイホック：ピアルー（バラ）、カユルー（篩：皮が厚いからへぎが取りやすい）、ヤン（背負い籠）、ご飯入れ籠、床板

(2) サナンピー村・カム族

- ①マイボン：畑の柵結い紐、ヤン、ピアルー、竹マット、飯入れ筒等の竹細工
- ②マイヒヤ：竹壁、フアツ（飯蒸し籠）、屋根葺き材、ピアルー、トリユール（篩）
- ③マイサン：床板、水筒、飯入れ筒、丸太の柱

(3) ホワイレンム村・カム族

- ①プリタラ（マイヒヤ）：家の壁板、カブン（籾運び籠）、米蒸し籠
- ②タネック（マイホック）：畑の柵の紐、屋根葺き茅の綴じ紐、ヤン（背負い籠）、カブン（籾運び籠）、ドーン（バラ）、クーン（篩）、床板
- ③マイサン：畑の柵の柱、床板、家の垂木、根太
- ④マイライ：畑の柵の紐

(4) ナムコンム村・カム族

- ①プリタラ（マイヒヤ）：家の壁板、カブン（籾運び籠）、米蒸し籠
- ②タネック（マイホック）：畑の柵の紐、屋根葺き茅の綴じ紐、ヤン（背負い籠）、カブン（籾運び籠）、ドーン（バラ）、クーン（篩）、床板
- ③マイサン：畑の柵の柱、床板、家の垂木、根太
- ④マイライ：畑の柵の紐

(5) ラットエン村・ラオ族

- ①マイヒヤ：家の壁板、フォアー（米蒸し籠）、サイ（筥）、コーン（魚籠）

(6) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイホック：ガドン（バラ）、クーン（篩）、モー（筥）、ヤン（背負い籠）、コーン（魚籠）
- ②マイサン：竹床、ガドン（バラ）、クーン（篩）、モー（筥）、ヤン（背負い籠）、コーン（魚籠）
- ③マイヒヤ：家の壁板（肉が薄くてやりやすい）、屋根葺き材、ガドン（バラ）、クーン（篩）

(7) ノンタオ村・カム族

- ①マイヒヤ：ヤン（背負い籠）、ドン（バラ）、クーン（篩）、床板、家の壁板、屋根葺き材、ブン（籾入れ籠）・・・節間が長く（1 疔ぐらい）、丈夫である。
- ②マイホック：食台笊、床板
- ③マイライ：屋根葺き材、畑の柵を縛る紐、屋根葺き材の茅を縛る紐、
- ④マイサン：柵の横木、屋根葺き材

4] 竹の子の美味しさ

(1) ノンタオ村・カム族

- ①ノーライ：6月～9月
- ②ノーサン：6月～9月
- ③ノーホック：①、②よりやや早め～9月
- ④ノーコン：12月～6月
- ⑤ノーヒヤ：6月、肉が薄いので余り食べないが、まだ土の中にあるうちに掘って食べる。繊維質が多くて食べない。

(2) コクナン村・タイルー族

- ①ノーライ：7月～8月
- ②ノーサン：4月～5月
- ③ノーヒヤ：7月～8月
- ④ノーボン：3月～4月
- ⑤ノーホック：7月～8月

※以下の二種類の竹はウドムサイに行く途中のソンチャー村にある。

ノーコン：株立ちではなく地下茎の竹で1本1本離れて生える竹。竹の子は苦い。

ノーマン：甘い竹の子

(3) ドウン村・カム族

- ①マイノーワン：6月 ※甘い竹の子
- ②マイノーコム：12月～6月 ※地下茎で伸びる竹
- ③マイノーホック：8月～9月
- ④マイノーラン：4月～5月 ※親指大の小さい竹で香りがよい
- ⑤マイノーパイ：8月～9月 ※家の近くにあり大きな株立ちの竹

(4) ナムコンム村・カム族

- ①マイホック：5月～6月
 - ②マイボン：2月～3月
 - ③マイサン：5月～9月
- ※マイヒヤ・・・何故か分からないがあまり食べない。

(4) ラットエン村・ラオ族

- ①マイヒヤ：6月の1ヶ月だけ。美味しい竹の子。

(5) サナンピー村・カム族

- ①ノーボン
- ②ノーホック
- ③ノーソッ
- ④ノーワン：竹の子を採るために植える。

(6) ティーンタイ村・タイルー族

- ①マイライ：6月～10月
- ②マイホック：6月～10月
- ③マイサン：6月～10月
- ④ノーコンム：12月～3月

(7) ハツサプーイ村・カム族

- ①ノーコンム：1月～6月
- ②ノーワン：3月～6月
- ③ノーラン：3月～5/6月
- ④ノークッド：5月～7月
- ⑤ノーソッド：6月～9月

⑥ノーヒヤ：6月～9月

5] 調理法

(1) ホワイレンム村・カム族

- ① パヌイ：ノーホックを皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日で干して保存する。食べるときは水に戻して食べる。市場で売ることもある。
- ② ノーソン：皮をむいて生のまま割いて、塩を漬けて揉んで壺に入れて、発酵させる。10日間で食べられるようになる。スープにしたり、野菜炒めに入れて食べる。
- ③ ノーヘオ：生のまま皮をむいて割いて、壺に入れて6日～7日経って酸っぱくなったら、天日に干して保存する。

(2) テンケーン村・ラオ族

- ① ノーヘオ：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日で干して保存する。食べるときは水に戻して、炒めて食べる。
- ② ノーソン：皮をむいて生のまま割いて、塩を漬けて揉んで壺に入れて、発酵させる。10日間で食べられるようになる。スープにしたり、野菜炒めに入れて食べる。
- ③ ノーカー：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、煮て塩味を付けて、再び焼いて食べる。

(3) シブンハー村・モン族

- ① チンジュアノー：皮付きのまま焼いたり、灰の中で蒸し焼きにして、皮をむいて辛子味噌を付けて食べる。
- ② ウアジュアコー：皮をむいて生のまま割いて、壺に入れ水を加えて発酵させて、それを天日に干して乾燥させて保存する。
- ③ キージュア：ウアジュアコーを外の野菜や肉と油炒めにして食べる。

(4) ナムコンム村・カム族

- ① スープ：皮付きのまま焼いて皮をむき、割いてスープにする。
- ② 発酵：生のまま割いて、塩を付け壺に入れて発酵させる。

(5) ティーンタイ村・タイルー族

- ① ノーカー：皮のまま火で焼いて、皮をむいて、煮て、塩味を付けて再び焼いて食べる。
- ② ノーヘオ：生の竹の子の皮をむき、割いて、臼に入れて杵で搗いて、竹筒に入れて発酵させ、3日間ぐらいして筒から出して天日で乾燥させ保存する。
- ③ ケーン：スープ

(6) ノンタオ村・カム族

- ① ケーン：スープ
- ② 焼き：ノーコンムとノーランは、皮の付いたまま火で焼いて、皮をむき唐辛子味噌を付けて食べる。
- ③ 煮る：煮て唐辛子味噌を付けて食べる。
- ④ 発酵：生のまま皮をむいて割き、水で洗って水切りをし、塩を付けて壺に1週間入れて発酵させて食べる。
- ⑤ 乾燥：皮をむいて生のまま割き壺に入れ、さらに水を口まで入れて、3日間して酸っぱくなってから、水を切って煮て、水を絞って天日に干して乾燥させて保存する。食べるときはケーンにしたり、辛子味噌に付けて食べたり、炒め物にしたりして食べる。

(7) ハッサプーイ村・カム族

- ① タバンタルワール：皮付きのまま焼いて、皮をむいて割いて、天日に干して乾燥させて保存する。食べるときは水に戻して食べる。
- ② タバンチャット：皮を剥いで割いて、塩を付け竹筒や壺に入れ、水を加えて10日間ぐらい発酵させる。その竹の子を取り出し、香辛料で味付けしたものをチョタババンチャット（漬け物・竹の子・酸っぱい）と呼ぶ。
- ③ ポクタバン：皮付きのまま焼いて食べる。（焼く・竹の子）
- ④ ケーン：生のを割いてスープにして食べる。

6] 伐採に関わる儀礼及び信仰

畑地の選び方を確認した。これは森の乱伐を防ぐシステムとして評価できる問題である。(1) ノンタオ村・カム族・・・《リヤップハレット（始める焼畑）》

- ①蜂の巣があったらだめ：「お前らは死ぬよ」という霊の知らせ。木の枝に蜂の巣がかかっている形は死人を選ぶ形であるから。
- ②木の上にアリの巣があったらだめ：「お前らは自分の頭を切るのと同じだよ」という霊の知らせ。アリの巣は人間の頭の形であるから。
- ③二つに分かれる木があったらだめ：お前らは家族の中から死人が出て水牛、豚などを殺さなければならないよという霊のお告げ。二股の分かれ木は、肉を焼くときに挟む二つ割りの竹と同じであるから。
- ④山刀で木を伐ってみて、鳥、虫、鹿が鳴く畑にしてはならない＝お前らも人が死んで泣くことになるよという霊の知らせ。
- ⑤米が穫れるかの占い：鳴かなかつたら、竹か木を丁度一尋切って“これから占いをさせてもらいます。もし、米が穫れる土地だったらこの竹か木を伸ばしてください。米の穫れない土地だったら短くしてください”と言って、地面に突き立てたり、森の中に投げ入れたりして、もう一度計ってみる。
- ⑥夢のお告げ：最後に畑にして良いか、良くないかを夢で知らせてくださいと唱えて家に帰る。「伐って良い」という暗示の夢は、川が洪水になっている所で泳いでいる夢。もしくは夢を見ない。「伐って悪い」という夢は、舟に乗ってどこかに行く夢（＝舟はお棺であるから）。車に乗ってどこかに行く夢（＝車はお棺を運ぶものであるから）、人が動物（豚、水牛）を殺している夢（＝死あるいは葬式の予兆であるから）、月とか太陽の夢（＝死人を焼く“火”を連想させるから）。

(2) ホワイレンム村・カム族・・・《クロンハレット（始める焼畑）》

- ①砥石、唐辛子、貝殻虫の巣と山刀による占い：いい日を選んで畑に伐ろうと思うところに行く。焚き火をして、その周りを掃除する程度に少し伐って、砥石を横に置き、家から持ってきた生姜をスライスして、唐辛子、貝殻虫の巣とともに串に刺し、1 畝ぐらいの枯れ竹の先を割って中に入れて焚き火で焙りながら、“ここで焼畑をしたい。もし、悪ければ今のうちに山刀の刃が外れて怪我をさせて知らせてください”と唱えながら、周囲を少し伐る。
- ②唐辛子、貝殻虫の巣による蜂や悪霊の祓い：生姜、唐辛子、貝殻虫が燃えている1 畝ぐらいの枯れ竹を、周囲の森に振りかざしながら“蜂や悪い霊は逃げてください。”と唱えてから、木に括り付ける。この臭いを悪い霊は怖がると言い、したがってこの臭いの及ぶ範囲は畑にすることができる。
- ③夢のお告げ：最後に畑にして良いか、良くないかを夢で知らせてくださいと唱えて家に帰る。「伐っても良い」という意味の夢は、大きな洪水の夢、山に行き石灰岩の崖を登る夢（＝稲が高く伸びることになるという霊の知らせ）。草が良く出る夢（＝川の貝を採る、網で魚を採ることになるという霊の知らせ）。「伐って悪い」という夢は、自分の家族が薪を運んでいる夢（＝死体を運ぶことになるという霊の知らせ）、鍛冶屋が火をおこす夢（＝土を掘って死体を埋めることになるという霊の知らせ）。

(3) ティーンタイ村・タイル一族・・・《マイハイ（印を付ける・焼畑）》

- ①いい日を選ぶ：いい日を選んで伐らないと怪我をする。
- ②印を付ける：自分の畑にする範囲が決まったら、その範囲を他人に知らせるために、木に刻みを入れて柴を刺しておく。

(4) サナンピー村・カム族・・・《伐り始めの儀式（特に呼び名はない）》

- ①唐辛子、貝殻虫の巣（による蜂や悪霊の祓い）：畑にしようと思うところを決めたら、家から砥石、唐辛子、貝殻虫を持って行く。砥石を置いて、火を焚き、唐辛子と貝殻虫を燃やししながら、“ここを畑にしたいと思います。もし良ければ良い夢を見させてください。もしダメだったら悪い夢を見させてください”と唱える。砥石はそのままそこに置いて帰る。砥石は伐り終わってから持ち帰る。
- ②夢のお告げ：「伐って良い」という夢は、洪水の夢か何も夢を見ない。「伐って悪い」という夢は、野生の動物を殺して肉を運んでいる夢。大きな丸太を運んでいる夢。蜂の巣の夢。切り株の根っ子を掘ったりし

ている夢。

(5) ナムコンム村・カム族・・・《ボンケーイ》⇒稲魂の継承を想わせる儀式

①いい日を選んで畑に行く。このとき必ず新しい鉋を作るか、古いものは刃の打ち直しをして持っていく

②畑にする場所に行き“ボンケーイ”を行う：C B A と先ず地面に形を鉋で描く。

A・B・Cの地点に、前年の“刈り初め”で刈り取って高倉の内側の壁に差しておいた穂を持ってきて、Aには穂の下の部分、Bには穂の真ん中、Cには穂先を刺す。同じようにバナナの木、砂糖きびの上中下を刺す。“稲の穂が前年の刈り穂のように、

稲の茎が砂糖きびのように強く、稲の穂がバナナのようにたくさん着くように“

*奄美のニャーダントイとの関連予兆

③焚火を燃やして、唐辛子、貝殻虫の巣を燃やして“これから木を伐りますので、ここにいる霊、虫、蜂、動物は外に（どこかに）行って（逃げて）ください。ここは私の畑にしますので”と唱えて、家に帰る

(6) ティーンタイ村・タイラー族・・・《マイハイ（印を付ける・焼畑）》

①自分の畑に伐る範囲が決まったら、その範囲を他の人に知らせるために、立ち木に刻みを入れて、そこに柴を刺しておく。そこが2度目の場所だったら、前回伐った人の了解を得なければならない。もし、その人が伐ると言った場合はその人の権利となる。

(7) ナムレーン村・カム族・・・《リッコンハレツ（儀式・選ぶ・焼畑）》

①家から塩、唐辛子、貝殻虫の巣、水竹筒、山刀、砥石を持っていく。道中は絶対に喋ってはいけない。また、後ろを振り向いてもいけない。これは、自分が霊（ピーー）を怖がらない態度で歩いていることを示す意味がある。

②畑の予定地に着いたら、水筒を置き、その森が人を土葬しているような所であれば厳しい霊がいるので、四つんばいになって口で薪を集める。その薪で火を焚き、塩、唐辛子、貝殻虫の巣を混ぜて焼くが、この時野生の鳥の鳴声がかきこえたら焼いてはならない。聞こえなかったら早めに火を着ける。その煙が森に広がると、森にいる霊がその臭いを恐がって逃げ出す。その後、周りの森を少し払って、竹の水筒と砥石は塩、唐辛子、貝殻虫の巣を焼いた跡に置いて家に帰る。2、3日後に伐りに行く。

7] 焼き始めの儀式・焼き方

(1) ティーンタイ村・タイラー族

①特別にないが、いい日を選んで畑に行き、伐った畑の中にある霊や生物に“この中にある霊はどこかに逃げて下さい。”“今日は畑を焼きますので良く燃えて良い畑になりますように”と祈る。

②下側から2人で左右にわかれて脇を上に移動しながら火をつけていく。風の方向を見ながら、風頭の人が火をつけ、風下は遠慮しながらつけまわす。

(2) ナムレーン村・カム族

①死者を土葬している森だったら、森から霊を追い出すために呪詞を唱えてから火を着ける。

8] 種蒔き始めの儀式

(1) ノンタオ村・カム族・・・プレク（始める）チュボン（突く）ハレツ（畑）の手順

①作小屋の右上の所に“トゥプ ハール”という片葺きの小屋を建てる。

②竹水筒を柱の根元に斜めに付ける。

③この下に種籾を入れたヤン（竹籠）とルン（突き棒）とを小屋の中に入れる。

④一匹のバツタを掴まえてきて、はねと尻とを火で焼いた後に、畑の中に芽を出している草や木の芽をとってきて、小屋の所で燃やす。“今日はこれから種まきをします。まく種子は少なくても収穫が多くなりますように”と祈って、バツタを放す。虫害がないように雑草が出ないようにという意味。種子まきが早く終わりますようにという意味もある。

⑤トゥプハールの周辺に数株をまく。株の数は決まってない。それが終わったらルンを畑の中に放り投げる。その後、ヤンの種籾をその穴の中にまく。

⑥この儀式が終わったら畑全体の本格的な種子まきを始める。

⑦畑全体の種まきが終わったら“トウプハール”は壊して家に帰る。壊さないと芽がよく出なくて稲の出来もよくなる。“稲の芽が良く出ますように、雨が降り土地に水分が十分ありますように”と唱えながら壊す。

(2) ハッサプーイ村・カム族

9] 蒔く種子の種類・・・多様さと早稲種の意味

(1) ハッサプーイ村・カム族

①早稲→ゴツラヨイ、ゴツラハン、ゴツプヌルルー、ゴオチャガール 9月初(ゴツパー)

②中間→ゴツライルー、ゴツタム、ゴツグラン 10月始 (ゴツアンドルック)

③晩稲→ゴツナン、ゴツチェルトレッツ、ゴツヒヤン、ゴツチャオ (うるち) 11月始

黒 粳米

10] 種籾と一緒に畑にまく種子

(1) ホワイレン村・カム族

①タレオの中に鶏頭の花を蒔く

②キウリ、インゲンは稲とまぜて蒔く

11] 稲以外で畑に種籾とはまぜずにまく種子等

(1) ホワイレン村・カム族

里イモ、糸瓜、カボチャ、キャッサバ、サツマイモ、ひょうたん、はとむぎ、なすび、とうがらし、ごま(白・黒)、冬瓜。特に、はとむぎとごまは道と畑の際にまく。また、里イモは竹の株のよく燃えた所、アリの巣の焼けた所に植える。

(2) ナムレーン村・カム族

プアツ(里イモ：少し窪みのあるところに植える)、糸瓜、キャッサバ、サツマイモ、ひょうたん、はとむぎ、なすび、とうがらし、ごま、冬瓜、生姜。特に、ルランルロン(鶏頭の花)は、小屋の周りに植えて、収穫の時に小屋をきれいに飾る。

12] 人間を愚弄する雑草

(1) ティーンタイ村、タイルー族・・・〈人間を愚弄するニャーカッピー〉⇔九州山地の人間を脅迫する紫露草との共通性が見られる

川の近くの畑は、ニャーパッカップが生える。この草は蔓のように這う草である。太陽の光の多いところには蔓も白く花も白いものが、太陽の光の少ないところには蔓も紫で花も紫のものが生える。この草は、もし俺を抜いて石の上に置いたら、畳のようないいところに座れるねと言い、俺を抜いて切った切り株の上に置いたら、俺は馬の背中に乗っているみたいで気持ちがいいよと言って、本当は死ぬくせに気持ちがいいと言って人間を騙す。また、俺を抜いて水に流しても、舟に乗っているみたいで、どこか岸に立ち寄って、また増えていくよと言い、俺を抜いて大きい穴を掘って埋めても少し根が残ってまた増えていくよと言って、人間を脅迫する。

(2) コクナン村、タイルー族

焼畑で一番困る草はトウゴーンという草で、稲が死んでしまうこともある。この草は、人間に嘘をつく。人間が抜き取って切り株に置こうとすると、私をここに置くともっと増えますよと言い、私を土の上に置けば死にますよと言う。

(3) ドウン村、カム族

ニャーカッピーは人間をだます。もし俺を切り株の上に置いたら馬に乗った気分になる(涼しくて気持ちがよい)。もし俺を火に燃やしたら3月の太陽ぐらいに寒い気分になる(本当は熱くて死ぬ)。

(4) ラットエン村・ラオ族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという節で増えていく草で、抜いたら袋に入れて腐るのを待って捨てる。二番目に困る草はニャーカッ、三番目はニャーキューという草である。人を騙す話はない。

(5) テンケーン村・ラオ族

焼畑で一番困る草はサンカラヨルンという節が増えていく草で、二番目に困る草はサオンウー、三番目はクルンソツという草である。人を騙す話はない。

(6) ナムレーン村・カム族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという節が増えていく草で、もし俺を抜いて切り株に掛けると馬に乗っているようにいい気分であると言って、人間を騙す。

(7) ナモン村・ラオ族

コロンプアーは人間をだます（おどす）。もし俺を土の上に置けばもっと増やします。もし俺を刈り株の上に置けば花を咲かして実になって下に落ちて散って、もっと増やします（本当は枯れて死んでしまう）。もし俺を谷や川沿いの所に置けば死にます（本当はもっと増える）。

(8) ナムコンム村・カム族

焼畑で一番困る草はチットサンカラヨンという草で、二番目に困る草はチットハッウーという草である。チットサンカラヨンは、もし俺を抜いて切り株の上に置いたら死なないよ、穴を掘って埋めたら死ぬよと言って人を騙す。

(9) ハッサプーイ村・カム族

焼畑で一番困る草はパラセック（鹿児島ホトケイザである）という草で、二番目に困る草はチンカイヨルという草で、薄赤い花を咲かし、節が増えていく花である。チンカイヨルは、もし私を抜いて切り株の上に置いたら花を咲かして実になって増えます。私を下（地面）に置いたら死にますと言って人を騙す。

(10) サナンピー村・カム族

焼畑で一番困る草はニャーカッピーという草で、二番目に困る草はニャーメンという草である。ニャーカッピーは、もし私を抜いて石の上に置いたら、太陽が当たったように温かい気分になる。また、私を切り株の上に置いたら、馬の背中に乗っているように涼しい気分だと言って人を騙す。

(11) ティーンタイ村・タイラー族

ニャーカッピーは、最初木の上に生えていたがなかなか土まで下りてこれなかった。そこで、人間に向かって“木の上においたら増やしますよ。土の上においたら死にますよ。”と嘘をついた。人間がそれを信じてそのとおりにしたら、死なずにいっぱい増えた。だから、根まで抜き取って丸めて切り株の上に置いたりする。

(12) ノンタオ村・カム族

焼畑で一番困る草はタゴンという草で、二番目に困る草はプレツという草である。タゴンは、もし私を抜いて石の上に置いたら、地面に落ちてまた増えますよ。また、私を下（地面）に置いたら死んでしまいますよと言って人を騙す。

13] 稲の刈り初めの儀式

(1) ホワイレンム村・カム族・・・ブロン（一緒に）ティー（日）ホット（籾をすごく）

①この儀式の最中はどんなことがあっても畑を出てはならない。

②家の女主人が美しく着飾り（家に伝わる遺産…ブレスレット等）を身につけて行く。この女主人をマゴー（稲の母）と呼ぶ

③作小屋をきれいに掃除し、籾を置く（収納する）竹マットを敷き、入口や柱にラングロン（鶏頭の花…ランマンゴ、ランマーゴ）を飾る。

花魂 稲 花 母 稲 ⇨鹿児島陸稲の中の鶏頭の花

④竹マットの上には前年の古い米を入れる。古い米が新しい稲の魂を迎えるという意味がある。

⑤ラングロンをラトウンという葉で包む。これをラパックという。これをウコンの周囲の三株を集めて、穂の直下をまいて、その中心に供える。その前に三株の籾は収穫してはならない。

⑥小屋の周辺の籾を“今日は収穫の日です。稲の魂は集まってください。”と唱えながら、一粒ずつ全粒ベン（籾入れ籠）に一杯入れる。

⑦それを小屋の入口に一握りずつ全部を小屋の米倉（竹マットを敷いた所）に投げ入れる。これを3回繰り返す。

返す。

- ⑧4回目は森に行く道の上側（左上）の所の籾をベン一杯扱いて米倉に投げ入れる。
- ⑨マゴーはA、B、Cのエリアが刈り終わる来年の種籾の種類を刈り取るまでは何も食べてはいけない。
- ⑩畑全体が刈り終わってもウコンの周辺の三株を刈り取ってはならない。協同している家全部の家の畑が刈り終わって、それぞれの家の“三株”を刈り取る。そうしないともし早く終わった人が三株を刈ったら、まだ終わってない人の家の稲の魂は逃げてしまうからである。“三株”の籾は作小屋の米倉の中に投げ入れる。三株の籾を混ぜることはしない。

14] カオハン（青米の焼米）⇔鹿児島焼米との共通性

(1) ホワイレンム村・カム族

マブルウップ：青い籾を扱き取ってきて蒸して天日に干して乾燥させて、精米して、再度蒸して食べる。今年は米が足りない、新米を食べたい時にする。早稲の種をする。鍋で炒めることはない。早稲は木を横に並べて晩稲畑とは区別して植える。儀式とは関係ないという意味である。

(2) シブンハー村・モン族

キンブレイ：青い籾を扱き取ってきて蒸して天日に干して乾燥させて、精米蒸す稲して、再度蒸して食べる。今年は米が足りない、新米を食べたい時にする。早稲の種をする。鍋で炒めることはない。

(3) ナンマオ村・モン族

キーンブレイ：青い籾を扱き取ってきて鍋で炒って、天日に干して乾燥させて、炒る稲精米して、再度蒸して食べる。まだ籾が青いから最初に炒らないと米が潰れるため、固めるに炒る。最初に蒸すことはしない。

(4) ノンタオ村・カム族

ゴブルウップ：早稲の青い米を穫って、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。早稲は儀礼がない。食べるとき少し水を加えて、ベタベタならないでいどに柔らかくして、蒸して食べる。去年の米が足りなくなったらゴブルウップを作る。また、美味しく、香りが良いので作って食べる。

(5) サナンピー村・カム族

ゴブルウップ：刈り始めの儀式に関係なく、その前に早稲の青い米を穫って、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。それを竹の筒に入れて焼いて食べる。

(6) ナムレーン村・カム族

ゴパラウップ：昔は、飯米が足りなくなったとき、ルイツ（泥棒）をしに行くといって畑に行き、正式な畑の入口とは違うところから畑に入り、早稲のまだ中途半端で青い米を穫ってくる。家に帰ってきて家の中に持ち込まず、家の外に置く。先祖たちの霊に見られないように、知られないように、家の外で脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。食べるときは、家の中で食べる。ゴパラウップは少量ずつ何回も作り、年によっては早稲の稲をすべて食べ尽くすこともある。

(7) ドウン村・カム族

マブルウップ：早稲が黄金色になる前に籾を収穫して、蒸して、天日に干して、搗いて精米して、再度蒸してご飯にして食べる。

(8) ハッサプーイ村・カム族

カオハン：刈り始めの儀式とは関係なく、畑の四隅に植えてある早稲種の（ラオ語）まだ中途半端で青い籾を刈り穫って、脱穀して、蒸して、天日で干して、蒸してご飯にして食べる。ヤン（背負い籠）で2～3個分ぐらい作る。初めて収穫したときには、先祖にも食べさせ、自分たちも食べる。去年の米があるなしにかかわらず作る。去年の米が足りなくなった時に、カオハンを食べる。

(9) ナモン村・タイラー族

カオハン：現在の水田稲作になってからはしないが、昔焼畑で稲を作っていたときには、飯米が足りなくなったときに畑に行き、畑の周囲のまだ青い籾を盗んで帰ってきて、脱穀し、蒸して、天日で干して、精米する。太陽がないときは、代わりに鍋で炒って、少し冷まして、精米して、蒸して食べる。

(10) コックナム村・タイラー族

カオハン：青い米のうちに触ると、米の魂に悪いことをすることになるから、カオハンを作らない。

(11) ラットエン村・ラオ族

カオハン：ピチーフットカオ（儀式・扱く・米）という収穫初めの儀式の前に、「稲の霊が知らないうちに泥棒してやる」といって、早稲の糯種の籾を畑から穫ってきて、蒸して、天日で干して、臼で搗いて、食べる。米の足りない人は、「他人の米を借りるよりカオハンをする方がましだ」といって、飯米の代わりにご飯に炊いて食べる。お米が足りている人は、香りがよいから楽しみにココナツのミルクと炊いて食べる。

(12) ナーニャンタイ村・タイル族

カオハン：まだ熟し切っていない早稲や中間種の糯の籾を畑から穫ってきて、蒸して天日で干して、臼で搗いて、食べる。ピティーヘッキヨ（儀式・始める・刈る）という刈初めの儀式の前にカオハンをやるときは、「稲の霊が知らないうちに泥棒する」といってやる。

カオマウ：作り方は、カオハンと同じであるが、小さい米をカオマウといい、そのまま食べるものである。

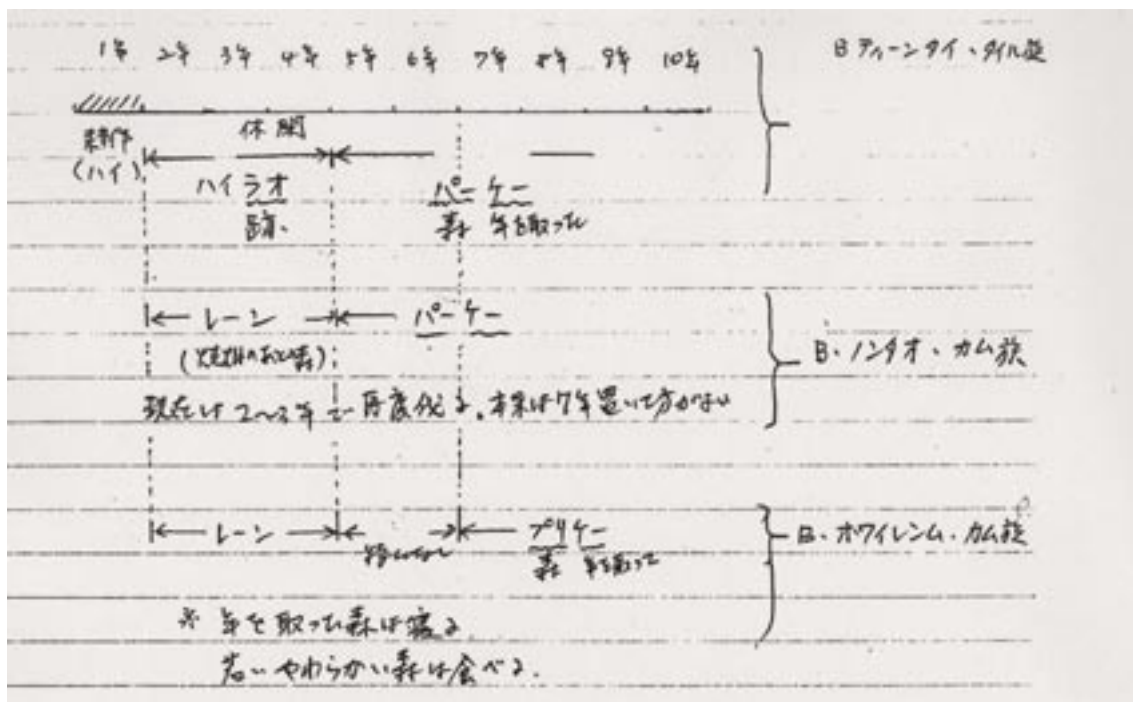
15] 焼畑その後—焼畑民の森の観念

(図を参照)

「年を取った森は寝る。若いやわらかい森は食べる」(B・ホイルム・カム族)

(1) サナンピー村・カム族

マイトンコップという木は、燃やしても種が死なないので、最初に芽生える。しかし、成長が早いので草取



りのとき芽が出ていても除去することはない。その後、1年くらいに伐った木のひこばえが出る。竹は小さいのが出て竹の子は採取できるようになり、2～3年目には大きく成長し、5～6年ぐらいうると竹細工に利用できるようになる。また、6～7年ぐらいで木を追い抜く。

3. 若干の考察

これまでの事例を通して、この地域の人が焼畑の適地として竹と木との混交した森を対象にしていることが明確になった。その大きな理由として水分の存在を挙げている。また、竹の再生が木の再生をも助けることにつながることもその基準の一つである。

その後に芽生える竹の子は、重要な食材となり伝統的調理法を生み出し、豊かな食文化の背景を形成している。さらに、成長した竹は竹細工の材料として用いられ、豊富な竹の生活道具を生み出している。サナンピー村（カ

ム族)の「マイトンコップという木は、燃やしても種が死なないので、最初に芽生える。しかし、成長が早いので草取りのとき芽が出ていても除去することはしない。その後1年くらいに伐った木のひこばえが出る。竹は小さいのが出て竹の子は採取できるようになり、2～3年目には大きく成長し、5～6年ぐらいうると竹細工に利用できるようになる。また、6～7年ぐらいで木を追い抜く。」という伝承や、ホワイレンム村(カム族)の「年を取った森は寝る」「若いやわらかい森は食べる」という伝承は、そのことを雄弁に物語っている。こうした竹に対する認識は“一年目はアワヤマ(粟の焼畑)、二年すれば竹の子畑、三年すればもとの竹山、十年すればまたアワヤマという”、鹿児島郡十島村悪石島の竹の焼畑の伝承と深くつながる。

こうしてみるとラオスの焼畑民にとって、「原始林」・「原生林」が「森」なのではなく、竹と木の混じった再生の森こそが「森」であり、人間にとっての“生きた”環境であると言えるのではないかと思われる。そして、このことが、中国の雲南やタイ北部、ミャンマー北部など周辺の回復不可能な赤肌の露出した山を生み出してきたことへの反省につながり、ラオスの森をそうしたことから回避する道筋を示しているように思える。

今後の調査に於いては、さらに事例の積み重ねを行い、南九州及び南西諸島との比較検討を加えていきたい。また、今回の報告からは省いたが、竹の生活道具の製作技術を具体的に記述し、併せて実物資料の収集を進め、その機能と変遷とを明らかにしていきたい。

稲作の儀礼についての考察に関しては次回の報告に譲ることにしたい。ただ、焼米のことについて若干触れておきたい。焼米の対象となるのは早稲種であり、カム族やモン族とタイ族系とはいささか差異がある。カム族やモン族においては、早稲は木を横に並べたり、畑の四隅に区画して、中間種や晩稲とは区別して植え、刈り始めの儀式とは関係ないという認識が窺える(ただし、ナムレーン村・カム族のゴパラウップ事例は、さらに注意深く検討する必要がある)。これに対してタイ族系民族のカオハンは、稲の魂から盗むという罪悪感を伴う。これは、日本列島の二つの焼米、つまり、柳田国男が主張した田の神への供物としての聖なる焼米と、川野が指摘する日常食の補給米としての鹿児島の焼米の差は、こうした文脈の中で理解するのが妥当であるかも知れない。焼米の議論の新たな展開が可能になるとともに、日本の文化の多様性あるいは多文化という構造を議論する民俗文化としての要素になりうる可能性があるということを指摘しておこう。